

【実現したい緑化プラン】

(目的及び公開性)

本キャンパスは都城市と公私協力方式により設置・運営が進められている。つまり、地域密着型大学として、地域住民と学生、教職員が協働で、キャンパスづくりを実施していく必要がある。本計画のヒーリングガーデンは、その1つの活動現場としてのコミュニティネットワーキングガーデンとして位置づけられる。乳幼児から高齢者まで、しょうがい(障害)の有無や年齢・国籍・社会環境などの状況の差異を問わずに誰もが緑の中で、安心してつろぎ、語らいながら、様々な活動を行う媒体となることで、誰もが自分らしく生きることが出来るコミュニティネットワークを構築する。今後、都城市全体に展開していくコミュニティガーデンのネットワークの要となることを期待される。また、人間だけではなく、人間以外の動植物などの生き物やそれを取り巻く環境にも配慮して、多様性を育むネットワークガーデンを形成していく。つまり、誰もが関わることが出来る、自分らしさと命のつながりを取り戻すために必要なコミュニティネットワークガーデンの形成を目指していく。そのために、幹線道路に向かって配置される大学正門やバス停に隣接し、大学の関係者に限らず、誰もがいつでも自由に入り、利用できる場所に設けられる。これは、南九州大学が従来実践してきたエコパークキャンパス構想の一環としても位置づけられる。

(デザインコンセプト)

都城キャンパスは、地域密着型大学として、地域住民や学生との協働でキャンパスづくりを実施していくことを目指している。また、大学には、教育者の養成や、緑地空間の創造を目的とする学問分野(人間発達学部・環境園芸学部)の設置も予定されていることから、学生の人格を磨くとともに、実践的な教育・研究上の成果をあげていくためには、さまざまな地域住民とのふれあいや交流が不可欠である。

計画設計のポイントとしては、下記の6つがあげられる。

教育・研究の場所として有意義で、実践的な緑の施設づくり(地域に密着した園芸療法の教育・普及)。

地域住民の憩いの場所、地域のオアシスとなる、みどり豊かなガーデンづくり(コミュニティネットワーキングガーデン、オープンガーデン)。

周辺の街路植栽、住宅の庭園などの緑地と一体感ある構成(みどりのネットワーク)。

しょうがいの有無や年齢等の差異を問わずに誰もが安心して利用できる施設づくり(ユニバーサルデザイン、園芸療法の実践による福祉のまちづくり)。

学生、地域住民、教職員等が自由に語らいながら交流の促進ができる施設づくり(ポケットパーク)。

維持管理では、学生の実習場であると同時に、地域住民の協力が得られ、コミュニティ醸成の核となるような空間づくり(緑・とよりのボランティア)。

(地域特性への配慮)

現在、学生と地域住民と連携したガーデンをつくるために都城市役所と連携して、地域にある自然環境や社会資源および地域文化の調査を実施している。これらの結果を踏まえながら、地域住民からの意見や要望に基づいて、地域史を踏まえた生命の多様性を育むガーデンやしょうがいの有無を問わずに活動に参加できるユニバーサルデザインガーデンを設置していく。そのために、都城キャンパスでの地域住民の活動促進を、学生と地域住民が協働して考えていくワークショップを実施する。また、学生と地域住民との協働により、キャンパスを基盤にした活動や、キャンパスの利活用を自主的に進める市民活動の育成に取り組んでいくことを視野に入れて、生涯学習の視点から地域社会連携機能の強化していくことを考えている。導入植物や社会環境に関する知見や情報の収集は、既に実施している。(芝・矮化樹木・壁面緑化などの植物材料や緑化技術、公園緑地・医療・福祉施設・教育機関・ボランティア団体などの社会資源および建築物・古文書を含む文化遺産などの地域文化)。

(使用材料)

四季の変化が体感でき、五感で自然を体感できる施設、誰もが植物とそこに訪れる生物や人と一緒につろぎ、語らい、活動することができる空間を指向し、下記のような材料を用いた空間要素を構築する。

・レイズドベッド(上げ床花壇):高さは、かがめない人用80cm、車椅子利用者60cm、子供用40cmの3種類を用意する。手が届きにくいところには少し草丈のある植物(ラベンダー、ローズマリー、チェリーセージなど)を植栽し、手が届くところには草丈の低い花や野菜を植栽する。

・エディブルガーデン:既存木の下部を活用し、内部には食べられるハーブ、野菜や稲、小麦などの食とのつながりを育てる可食ガーデンを形成する。

・パリアフリー芝生:車椅子の利用者でも寝そべることができるように傾斜をつけた芝生地や芝生の椅子など。ウィンターオーバーシーディングも施工する

・市民交流花壇:地域の住民と大学が協働で維持管理する花壇。ドイツの小学校で多く採用されているらせん形状として、立体的に表現可能。

・エスパリエ:既設の露出壁面にタカナベカイドウとノカイドウを組み合わせ、ワイヤーで誘引して仕立てる。既設キャンパスの立地する高鍋町の固有種を引き継ぐ。既存木の幹周りにヤブラン、リュウノヒゲなどの地被植物を植栽する。

・つる植物のトレリス(格子垣):トケイソウ、クレマチス、ムベ、アケビ、ブドウ、ツルジャスミン、ツルハナナス

(住民等の参加)

本ガーデンの設置および運営は学生と地域住民が協働して、実施していく。地域住民参加のガーデンワークショップといった方法で、ガーデンづくりのプロセスを公開し、今後もあらゆる情報を公開することに努め、地域に開かれた大学づくりを進めていく。

第1に、定期的にワークショップを開催し、キャンパスに関心がある人、意見のある人が無理なく参加できるように、あらかじめ日時を設定し、都城キャンパスの問題点や参加者の提案などについて議論する。

第2に、都城市との協力の下で広報・ホームページ、ニュースレター、新聞、ラジオ等の各種メディアを通じて地域住民に都城キャンパスづくりに関する取り組みを広報・周知する。そして、シンポジウムやワークショップは参加者を限定せず、誰でも参加できるようにし、これらの経過は、随時ホームページにも掲載して情報を公開する。

第3に、また、ホームページやオフラインパーティ(飲み会)などの方法で常に地域住民と学生とが意見交換できる仕組みについても取り組むことも視野にいれる。

以上の取り組みを通じて、すべての人々がガーデンを楽しむことが出来るよう、活動などの多様な選択肢を提供し、利用者が自分に合った選択をできるように適切な情報の提供をおこなう。

(維持管理)

維持管理を含むガーデン運営は学生と地域住民が協働して、実施していくために、ガーデン運営委員会を設置する。ガーデン運営委員会は学生、地域住民、市役所職員および教職員から構成され、様々な活動を学生や地域住民の動きにあわせて企画・運営を統括する。実際の維持管理はガーデン運営委員会の元に入るピオトープやユニバーサルデザインなどの領域別、子育てサークルや知的しょうがいしゃのオープンカレッジおよび高齢者の介護予防などの対象者別のワーキンググループを結成して、大学の授業や地域住民向け講座で行うとともに、ガーデン運営委員会やワーキンググループが学生や地域住民との協働により行っていく。また、学生と地域住民が協働して、育てた植物の苗やコンテナガーデン、収穫した花や緑を用いたクラフト、育てた野菜や果物などを加工したり、料理したものを維持管理した方だけではなく、セカンドハーベストとして参加していない地域住民に実費で提供することで、新しい参加者の確保につながる。また、地域とのつながりを深めていく管理運営を構築する。そして、地域住民にガーデンに対して見守りの目を増やすことで、安全性を高めていく。さらに、剪定した枝葉など維持管理で出た植物残渣を隣接するフィールドセンターにおいてエコスタックに、また大学生協同組合から出る残飯とあわせてのコンポスト化、雨水をためて、ガーデンの散水に使うといった環境にやさしい維持管理を行っていく。本キャンパスにはこれらの管理を可能とするバックヤードとしての温室群があり、これらによりサポートされる特長を有している。

(緑化の実現)

ガーデン利用の実態を確認しながら多くの利用者の意見を取り入れ、またエコキャンパス計画(本応募案を含む全体計画)の進捗状況を公開していくために、都城キャンパスの中に学生と地域住民が協力して、プロジェクトハウスを設置する。プロジェクトハウスには週に1~2日程度、学生や地域住民が常駐し、サロンを開きながら途中経過を展示、公開するとともに来園者の都城キャンパス利用の様子を調査したり、アンケートや聞き取り調査で意見を伺うとともに、来園者からの様々な質問や相談に応じる活動を実行する。また、地域にある保育所、幼稚園、小・中・高等学校および医療・福祉施設等と連携しながら、都城キャンパスを自然環境・社会システム・デザインなど様々な分野の学習フィールドとして提供していく。インターコミュニティワークショップといった共同の取り組みにより学生同士の交流を促したり、しょうがい・世代・国籍・社会環境を越えた生涯教育の場として活用することで、都城キャンパスがもつ教育的可能性を広げることが考えられる。

(その他)

本キャンパスの前身である高鍋キャンパスは、里山の要素が色濃い広大な造園実習場を含むエコパークキャンパスをイメージして造園活動が展開されてきた。この環境にやさしい園づくりの哲学を引き継ぎながら、造園活動に科学的にアプローチする研究的側面を同ヒーリングガーデンには付随させることを企図する。例えば、既存木であるケヤキやクスノキの自己集水能力を最大限に発揮するような剪定方法や雨水利用方法の検討、同地区では導入実績の少ない芝生におけるオーバーシーディングを可能とする維持管理方法の検討などが、本ガーデンエリア内で行なわれる研究活動の一部である。これらの取り纏められた成果は関連学協会等において積極的に公開される予定である。都城キャンパスの敷地は高鍋キャンパスに比べコンパクトになることから、精度の高い造園空間の創出が可能となる。また、上述したように、ゼロエミッション、水・物質循環システムを前提にした維持管理方法を徹底し、今後のガーデン・キャンパスのあり方について模索していく。